

第2回町田市文化プログラム推進計画策定検討委員会 議事要旨

日時	2016年11月2日(水) 午後2時～4時
会場	町田市役所2階 市民協働おうえんルーム
出席者	■委員(敬称略) 三上豊氏、香取幸一氏、米増久樹氏、松香光夫氏、本多浩子氏、 高野賢二氏、西田司氏、仕田佳経氏 ■事務局 文化スポーツ振興部 田後部長 文化振興課 小田島課長、清水担当係長、寺井担当係長、戎谷主事、山田 ■運営支援 株式会社丹青研究所
資料	資料1 2020年に向けた文化プログラムの動向 資料2 町田市文化プログラムの方針の検討 資料3 町田市文化プログラムによりめざす将来像の検討 参考資料1 「東京2020 参画プログラム」パンフレット 参考資料2 「多摩伝統文化フェスティバル2016 伝承のたまてばこ」パンフレット

会議内容

1. 開会の挨拶

小田島課長より、開会の挨拶および資料説明を行った。

2. 市制60周年事業の検討状況

文化プログラムと同様に2018年、2019年、2020年の3ヵ年を60周年の記念プロジェクトの期間とし、地域で取り組む地域性と、次世代育成という二つの視点で検討している。

3. 議事

- (1) 町田市文化プログラムの「方針」と「めざす将来像」
- (2) その他

事務局より、(1)の説明をパワーポイントを用いて行った。

■「方針」について

<「文化の再認識・継承」の視点>

委員：観光庁ビジョンでは「住んでよし、訪れてよしの国づくり」という副題がついており、地域に誇りを持つことに着目している。文化という視点から市民が誇れるものを設定することで、将来的に市民のためになるのではないかと。

<「次世代育成」の視点>

委員：国では青少年の育成事業が進められていることから、青少年に文化を伝えるという視点も必要ではないかと。次世代育成という視点に基づき、若年層をどのように取り込んでいくかが課題である。生け花の団体では参加を促すために、子どもや留学生に声掛けを行っており、そのような取り組みも必要である。また、障がいのある方と一緒に取り組むという視点も必要と考える。

委員：次世代育成として、子どもを中心に町田市の文化を発信してはどうか。家族等を含め参加者も広がるのではないかと。

<「社会包摂」の視点>

委員：過去から現代へとつながる、文化の継続性という視点も必要ではないか。LaManoでは障がい者と子どもたちが一緒に絵手紙を制作する取り組みを行っている。同様の取り組みは老人ホームや子ども施設などでも行われており、それらを町田市の文化プログラムとして取り入れてはどうか。

委員：文化の多面性、多様性を意識してもらう機会も必要ではないか。文化プログラムのなかに、そのような視点が含まれたイベントの開催があると良い。

<「まちづくり」の視点>

委員：「地域活性化」は市制 60 周年事業と重複が懸念されるため、ここでは文化に特化した方針と位置付けてはどうか。

委員：町田市は昔から市民活動が活発な土地柄であるが、その論理と文化が埋もれているように思う。まずは、文化資源を発掘し広く紹介することを目的とし、文化を使ったまちづくりという視点は、二次的なものとしてとらえてみてはどうか。

■町田市文化プログラムにおける「文化」の定義づけについて

委員：文化とは文化芸術などのアートを意味するのか、それとも食文化のような生活文化等も含むものなのか整理する必要がある。

委員：文化の定義づけを行い、方向性を具体的にする必要はある。観光庁では郷土芸能の観光資源化に取り組んでいる。

委員：文化の範囲として生活カルチャーという視点を加えても良いのではないか。

委員：食文化を通すと国際交流に参加しやすくなる。

委員：各国の大使館や総領事館では、文化交流が役割の一つとして位置づけられている。例えば、大使夫人が住民や町田市内の商店に食文化を広めるという交流イベントなど、食文化を通じた交流により事前キャンプの誘致にもつながる。

委員：歴史にしても食文化にしても、子どもを中心とすることで受け入れやすくなる。

委員：これまで 10 年ほど横浜のアートプロジェクトに携わってきたが、クリエイターの数自体は増加していない。ハイカルチャーの人口と、文化の参加者数とは異なるものとして捉える必要がある。

委員：市民の文化に対する意識を高めることにより、参加者数も増えるのではないか。日常生活のなかにも文化があるということを、印象づける必要がある。

■町田市の文化資源

委員：市内で取り組まれている文化プログラムについて知る必要がある。

委員：町田市郷土芸能協会の加盟団体が町田市郷土芸能まつりとして毎年 2 月にそれぞれ 15 分程度の披露する機会がある。太鼓やエイサーなどもあり、それらを町田市の文化とするか議論はあると思うが、来年で 37 回目を迎え、地域の祭りに参加している団体が上演する恒例行事となっている。子どものほか、継続的に取り組んでいる女性など、団体により参加者はさまざまである。また、これまで続けられてきたイベントではあるが、文化プログラムと関連づけた取り組みを行っても良いのではないか。

委員：町田市のエイサー祭は、どちらかというと商業イベント的な要素があり、市民が一体となるようなイベントが町田市には無いように思う。市制 50 周年の時に行った市内の神輿を集めたイベントは好評であった。

委員：町田市にしかないプリクラがあると聞いたことがあるが、表には出てこない文化もあるのではないか。

委員：福祉施設のなかには、染織した糸を使ってブローチをつくるなど、南アフリカと染織を通して交流しているところもある。

■文化プログラムの展開

<ストリートカルチャーの取り込み>

委員：原町田大通りを封鎖してイベントを行えるかということや、ストリートカルチャーを文化として認識しているかという課題がある。

委員：ストリートカルチャーという意味で「道路文化」を打ち出すと、他の文化プログラムとの差別化が図れるのではないか。

委員：道路を活用し、打ち水と将棋というような文化の掛け合わせも面白いのではないか。

<地域資源の取り込み>

委員：大規模なアートイベントよりも、既存の文化資源をアレンジ、ディレクションすると良いのではないか。

委員：ご当地検定の実施を検討したが、ビジネスモデルとして成り立たないため実施に至っていない。

委員：ご当地検定は、子どもなど教育的視点を取り入れることで広がりやすくなる。

委員：観光MAPを持って廻った体験について、「いいね」という批評だけが残るのではなく、記録されていく仕組みがあるとよいのではないか。日頃気づかないモノやコトを発見するツールがあると、地域資源の再発見につながると思う。

委員：ハイカルチャーからストリートカルチャーまで、町田市の取り組みを一体的に魅せることにより、町田市の文化として認識してもらえるのではないか。

<展開の仕方>

委員：施設内で完結するのではなく、周辺地域に広げていく仕組みが必要ではないか。イベントを通して町田市に住んでいるということをイメージしてもらうことが必要である。

委員：市内に点在する文化資源を線でつなぎ面とする視点が必要である。さらに、縄文や自由民権運動など、ヨコだけではなくタテのつながりも考えると良いのではないか。

委員：ご当地検定の答えが街中にある、ということで点と点を結ぶ線となる

<取り組みの進め方>

委員：将棋のような文化からハイカルチャーまで幅広いため、段階的に取り組んでいくことを視野に入れてはどうか。

<ガイドブックの制作>

委員：町田市の文化紹介冊子を作るという内容も含めてほしい。ガイドブックとした場合、それらの基礎情報を紹介する必要がある。

委員：それを、どのように注目させるかという視点も必要である。例えば、ガイドブックとオリジナルの切手をセットとするなど、ちょっとした仕掛けが必要ではないか。

■情報発信

<情報収集>

委員：庁内で各課が行っている文化に関わる情報の吸い上げが必要である。

委員：公募するというのも良いのではないか。

<市民や来訪者への情報発信>

委員：取り組みを継続的に行う意義を市民に伝える必要がある。広報紙のみならず新聞等も活用してはどうか。イベントそのものの検討も必要ではあるが、情報発信媒体がどう

あるべきかについても検討する必要がある。

委員：インターネットを活用した情報発信が必須となるが、その一方で、新聞で情報収集を行う方々も根強くおり、併用しての情報発信が有効と考えられる。

委員：情報媒体におけるデザインを工夫することで呼び水になるのではないかと思う。

委員：ぼっぼ町田では「まちの案内所」を設けて、情報の受発信を行っている。多言語対応や費用など課題はあるが、ぼっぼ町田を町田市の情報拠点として活用してもらえりような機能の充実を図りたいと考えている。

委員：文化プログラムでは教育という視点を活用すれば現在の取り組みを意識的につなぐことができるのではないか。お祭りやメロンなど、町田オリジナルのものについてはメディア等を活用するとよいと思う。

委員：お祭りなどの無形文化も含めて、町田市の多面的な文化を紹介するとよい。また、情報提供してくれるインフォメーションセンターがあるとよい。

＜外国人への情報発信＞

委員：市内在住の外国人に母国に向けて情報発信してもらうのも良いのではないか。海外からの評価を受けて、市民の参加意識を高めるミラー効果が期待できる。

委員：外国人に向けた市内マップの作成に取り組んでいる。20人を対象にサンプリングやアンケート調査を行う予定でいる。

■「将来像」の考え方

委員：将来像としては、今あるものを再認識し活動のレベルを向上させることができるとよい。

委員：資料3にある「身近にある文化芸術を発見し、楽しみ、伝える機会を拡充する」という文言を将来像として膨らませてはどうか。「楽しむ」や「発見する」など、南アフリカとの国際交流を含めることができる。

■その他

事務局：市制60周年事業のコンセプトを検討中である。町田市文化プログラムとして検討された事業が、文化プログラムとして、もしくは市制60周年事業のどちらかで取り上げられる可能性がある。

事務局：本日の協議では、以下のようなご意見をいただいた。

- ・文化の範囲をハイカルチャーから生活文化まで広がりを持たせること。
- ・文化プログラムは町田市の文化を認識する機会とすること。
- ・寛容性や多様性、外国人や障がいのある方の参加など広がりのある取り組みとすること。
- ・現在の文化資源を点として捉え、それぞれを線で繋げ、面へと広げる取り組みとすること。
- ・ストリートカルチャーという視点も取り入れること。
- ・「身近にある文化芸術を発見し、楽しみ、伝える機会を拡充する」をもとに将来像の文言を検討すること。

なお、ご意見をもとに次回の協議資料を作成し、事前にご報告する。